

草津市立矢倉小学校通信 令和元年 11 月 15 日 NO.13



～ひとみキラキラ豊かな心と体の矢倉っ子～

「これって、ダメだなあ。」と素直な気持ちで行動を起こすこと

朝の挨拶をしながら校門に立っているときのこと、いつもは素通りする一年生の一人の子が、ずいぶん向こうから私を見ながらまっすぐやってくる。やがて「こんなのが落ちていた。」と空っぽのペットボトルを差し出した。聞けば、道ばたに落ちていたという。

それは明らかにゴミなのだが、どうしてまたそれを拾って私に渡すのだろうか。「私はゴミ箱ではない。」と言いたくもなかったが、何かわけがあるに違いないと、その子を見つめた。その子は当たり前前のことだと言わんばかりの顔つきである。決して私を困らせてやろうというふうでもない。どちらかと言えば、とってもいいことをしたという、晴れやかな、満ち足りた顔つきだ。そんな心意気が受けとめられると、「そうかそれなら受け取らせてもらおう、ごくろうさん、ありがとう。」と自然に思えてくる。

「ポイ捨てによる環境破壊」こうした現代社会の問題を、少しでも解決に繋いでいくためにも、ゴミが落ちていれば拾うべき…そんな言い回しは大人の理屈だ。路上に捨てられたゴミを見て、どうするのがすばらしいのか。ためらいがちにあれこれ考えを巡らせることと、「あっ、落ちてる！あかんなあ…。」そう感じて、素直に拾い上げることは質が違うように思えてならない。ゴミを拾ったら自分でゴミ箱に入れるところまですべきだなどと指導するのも、急いでいるのならゴミが落ちていても拾わず、見て見ぬふりをするのが普通だろうというのもどこか後ろめたい。その子のように素直に拾い上げていないことの言い訳だからである。「大人になることは、ずるくなることなの？」という声が聞こえてきそう。

「これって、ダメだなあ。」と、素直な気持ちで行動を起こすことのよさは、行いとして目に見えるものとなるとき、一層あざやかなものになる。私の独りよがりな主張だと言われるかも知れないが、私としては、この話を家庭や地域でも話題にしてもらうことで、回り回って、その子の心に再び響いてほしい、そしてもっと多くの子どもたち、大人たちの心にも響いてほしい、そう願っている。